
MIZUKI

たこわさび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MIZUKI

【Nコード】

N9094Q

【作者名】

たこわさび

【あらすじ】

ミズキ先生憑依伝。一般人がミズキ先生に憑依して奮闘するお話です。

登校前

朝 起きたら信じられない事になっていた。

私の名前は 水木 正蔵。某企業に勤める善良な労働者。22才。
昨日は会社の宴会で、久々に体にアルコールを入れたせいか、はめ
をはずして飲んで騒いでいた訳で。

くどいようだが、朝 起きたら信じられない事になっていた。

「、、、、きてください。朝ですよ。起きて下さい。」

聞こえてきたのは男の声。体を揺すられているようだ。目を開けた
ら見知らぬ部屋。そして、俺を揺すっている変な格好をした見知ら
ぬ男。

俺はソファの上に寝かされていたようで、毛布にくるまっていた。
すべてが見知らぬ光景のためか、目は一瞬で覚める。そして、ガバ
ツとソファから身を起こす。

「まだ時間がありますからそんなにあわてなくて大丈夫ですよ。」

見知らぬ青年は湯飲み茶を入れて出してくれた。

青年の服装は、奇怪と言ってもさしつかえのないでたちで、着物
のような服の上には変な色をしたベストを羽織り、おまけに変なハ
チマキを巻いている。まるで、あのマンガの中に出てくる忍者のよ
うな服装だ。

世間一般でコスプレと言われるものだろう。朝からこんな格好をし
ている成人男性を見ると、日本もくるところまできたか。と思えて
くる。

俺はそんなコスプレ青年に朝から介抱されている訳で。

「シャワーでも、浴びてきたらどうです？」

コスプレ青年から衝撃的な言葉が発せられた。
それはつまり、「やっちまった」って事かい？

酒は強くないが、記憶をなくすほど飲んだ事は今までなかったはず。昨日はたしかにはめをはずしてはいたが、そんなに飲んではいなかったはずだ。

必死に昨日の事を思い出していると、3次会のところから記憶がなくなっている事に気づく。

最後に覚えているのは、職場では「隠れ変態」の異名を持つ部長にフラフラと着いて行く自分の姿。

おそらく、あ後は新宿あたりのどこかのコスプレオカマバーに入ったのだろう。

そして、目の前で茶をすすってるコスプレ青年は、きっとお店の人だろう。と、自分の考えに結論をつける。しかし、まだ問題は残っている。

問題は、やっちまったかどうかってところだ。

仮に、ベッドの上で裸っていう状況だったなら、完全にアウトだろう。

しかし俺は、幸いにも？寝かされていたのはソファの上である。
まずは身の潔白を証明すべく、己の下半身をチェックしようとした時、さらなる衝撃の事実を知る事になった。

俺の服装は、コスプレ青年と一緒に服装をしていたのだ。

これはつまり、酔っ払った俺はこのコスプレ青年の部屋まで連れてこられて、同じ服装に着替えさせられ、忍者プレイにおよんだ。という事だろう。

服を脱がされた時点で完全にアウトだ。

意識のない昨晚の俺は、忍者プレイとやらが終わった後、目の前のコスプレ青年に

「とんだ抜け忍だったぜ。そこで一晚すまきになって頭冷やしな。」

とか言われてソファに寝かされていたんだろう。

衝撃のあまり頭を抑えつつむいていると

「大丈夫ですか？具合でも悪いんですか？」

と、コスプレ青年は心配そうな顔で覗きこんできた。優しい言葉をかけるな。

「いやいや！ぜんぜん大丈夫です！」

これ以上 奴の間合いに入ってはまずいと思い、遮るように両手を顔の前で振った。

結果として俺は「やっちゃった」訳だが、昨晚の事は記憶にはまったくくない。

全裸で身ぐるみをはがされて公園で発見されるよりは、良しと思う。と、無理やり前向きに考えてみた。

「シャワーはともかく、洗面くらいしたらどうです？ミズキ先生。」

お茶を飲み終わったコスプレ青年は、部屋の中の洗面所と思われる

場所を指差した。

お前に先生と言われる覚えはない。と思いつつも、衝撃で爆発寸前の頭を冷静にするため、言葉に甘えて洗面所に行き、鏡を見たら

「ッー！」

俺じゃない！

鏡に映っているのは昨日までの俺ではなく、まったくの別人が映っていた。本当は違う人なのではないかと思い、ほほをつねったり、ひっぱたいたりしてみても、鏡の中は同じ動きをするだけだった。鏡に映っている俺は、どこか意地の悪そうな顔をした灰色の長髪。あのマンガで見たことのある、あの顔だ。

朝起きてから今まで色々な推測をしていたが、ようやく、点と点が線でつながった感じた。

という事は、俺を介抱していたあのコスプレ青年は、

「、、イ、イルカ先生？」

「何ですかミズキ先生？」

ドンピシャだ。

俺は、という訳かナルトの世界に。それも、あの悪名高いミズキ先生に憑依してしまったみたいで、。

現実がマンガの世界にきてしまった事には驚いたが、身の潔白がアウトからセーフになりつつある事には、内心ホッとした。

洗面を終わらせたあと、ミズキ先生を装って、イルカ先生にいろいろと聞いてみたところ、

1、昨晚は職場の宴会であった事。これは現実と一緒にようだ。

2、昨日の俺は^{ミスキ}かなり酔っていて、宴会が終わったあとモイルカ先生の部屋に乗り込んできて、くだをまくだけまいた後、そのままソファで寝た事。最低な奴だ。

3、今日は休暇前の最後の授業で、明日からアカデミーの生徒達は夏休みに突入する事。そんなシステムだったわけ？

イルカ先生から聞いていくうちに

「ホントにミスキ先生ですか？」

と怪しまれて、幻術返しとやらをかけられそうになったが、全力でアルコールのせいにして記憶がまったくないと言ったら、信じてくれた。

いい人だ。

そうこうしているうちに、アカデミーへ行く時間となったようだ。

イルカ先生と一緒に木の葉の里のアカデミーへと向かう。

道すがら、イルカ先生にアカデミーで今日行う授業内容をそれとなく聞いておいた。

なんせ昨日までは水木正蔵という一般人。しかし、今はミスキ先生という木の葉の里の中忍で、子供達の教師という聖職についているわけだ。失態があつてはならない。怪しまれはしたが、今日は休暇前と言うことで、特に授業はなく、宿題や休み前の注意をして終わりという事らしい。

なぜ俺がナルトの世界にきてミスキ先生に憑依したのか。理由はわからないが、この世に運命というものがあるとすれば、必ず何かしらの理由があつて人間は運命に沿って生きているのだと思う。

俺がここににいるのも、きつと何かの「運命」なのだろう。

だとしたら、結果はどうであれ、吉となるか凶となるかはわからないが、俺は出来る事をこの世界でも全力でやらなければ行けないんじゃないか。

そんな事を考えながら、イルカ先生とともにアカデミーの門をくぐった。

今日の木の葉の空は、快晴だ。

明日からは休暇らしいから、とりあえず、今の俺が全力でできる事を考えてみる。

まずは忍術等の練習。

昨日までは一般人だったのだから、忍術ができないのは当然。できるかどうかはわからないが、やるしかない。この世界では死活問題にもなるので、最重要項目だ。

そして、子供達に教える授業内容の理解。先生ができなければ生徒に教える事はできないのだ。自分の術の練習と平行してやっていく。

さいごに、生徒の顔を覚える。原作に出てきた奴なら知っているが、生徒はそれだけではない。原作のクラスを受け持っているとは限らないし、先生は誰にでも公平でなければいけない。米軍海兵隊の教官もそんな事を言っていたような気がする。

問題は山積みだが、それだけ目標があるという事だ。

できないいは後にして、それを一つずつやっていくしかない。

隣にいるイルカ先生の顔を見れば、教師の顔をしている。

アカデミーの中に入り、俺の新しい職場ともいえる職員室に入る前、イルカ先生に最後の質問をした。

「イルカ先生？」

「なんですミズキ先生？」

「、、、、昨日の夜、変なコトとかしてないですよね？」

「ハア！？」

俺はどうやらセーフなようです。

隠れ変態の部長がこの世界に憑依していない事を祈りつつ、俺は職員室の中に入った。

今朝 起きたら本当に信じられない事ばかりであった。

H R

子供の頃、先生の姿を見てどう思っていただろうか。

純粋な頃は、怒ると恐いけど優しい、すぐくおもしろい、頭がとてもいい等といった存在であると思っていた。

ひねくれはじめた頃は、うざい、うるさい、めんどくさい。

もう少しひねくれはじめた頃には、いつも靴下が破れてる、トイレから出たあと手を拭かない、英語の発音が気持ち悪い等。

大人になりはじめた頃には、俺に教師は絶対無理だ。

この世界にくる直前では、幼なじみの同級生が教師になったという事を聞いて、俺の中での教師とは、素直に尊敬できる存在になっていた。

その、尊敬の念を抱いた教師に俺は異国の地になっちゃっている訳で。

授業開始前の時間。H Rだ。

俺は約30名もの生徒達を前に、教壇に立っている。

昔はH Rの時間なんてろくに先生を見ちゃいなかった。それは今も昔も変わらないはず。

しかし、教壇に立ってみてわかった。物凄く生徒の視線を感じる。感じすぎて足がガタガタ震え出しそうな勢いだ。

足の震えをこらえ、ついさっきまで職員室でイルカ先生や自分の机の引き出しから収集した情報を反芻する。

アカデミーは学年別の編成。だいたい1学年3から4クラス。うち

1クラスが女子クラスだ。俺やイルカ先生のような若手教師の立場は、完全に1クラスを担当している訳ではなく、クラス担任補佐といった感じた。

授業も担任がすべて受け持つわけではなく、教師の持ち回り、得意分野で指導をしていくスタイルらしい。

そして俺の今日の仕事は、担任補佐クラスの出席取りと夏休みの宿題の配布。

休み前の注意や個別の指導とかいったのは、今日は正担任の仕事だ。

言い方は悪いが、楽な仕事といってもいいだろう。

なんせ昨日こっちの世界にきたばかりである。非常にツいていると思う。

ちなみに正担任は、矢武ゲンヂ中忍。概ね30才前後。色黒で渋みのきいたイケ親父だ。火遁が得意らしい。一般出身。

ゲンヂ先生には職員室に入ったとたん

「おはよう！ミズキ先生！今日もよろしくね！」

と、いきなり挨拶された。さわやかな人だ。

話はそれだが、今は俺の目の前の仕事。出席取りに集中しよう。

出席を取るなんて生まれて初めてではないだろうか。いきなり噛んでしまわないように注意深く、そして明朗な声を意識して口を開いた。

「じゃあ、出席をとるぞ。」

おっ。我ながらいい感じた。後は生徒の名前と顔を確認しながら、

30人の出席を取れば、この任務は完了だ。

「1番 あおつきノリホ。」

おつ。またまたいい感じた。

後はノリホ君の返事を待つだけ、。

しかし、一向に返事をする声は聞こえてこない。

聞こえなかったのだろうか？

もう一度 名前を呼んでみる。

「あおつきノリホ？」

だが、クラスはしんとしたままで、返事をする生徒はいなかった。

名前を読み間違えたのか？しかし、ひらがなとカタカナだけの名前を読み間違えるなど、。

あるいは「木の葉流」の出席取りのしきたりがあって、俺が間違えていたのだろうか。

不安になって出席簿を必死に凝視していると、ドッとクラスが笑いにつつまれた。

何事かと思い真顔で生徒達の顔を見る。何かおもしろいことやったっけ？

「先生！隣のクラスの出席とってますよ！」

1人の生徒が笑いながら教えてくれた。あ やっちまった。

あれだけ職員室でクラスを確認していたのに、ここでミスるとは、。

「イルカ先生も最初の頃、同じ事してたよな！」

また1人の生徒が言うと、教室はさらなる笑い声につつまれていくのであった。

完全にやっちゃった。が、これ以上の失態は許されない。

下手に怒鳴って静めたりすると、これからの空気が悪くなるのは当然だ。ここは一つッ

俺は最初に発言した生徒に対し、「キミ、やるね」的な笑みとともに指を指した。

どうだ、見たか。これが大人の余裕というやつだ。取り繕う事はできただろうか？

つかみはオツケーなのかどうかはわからないが、気持ちで幾分楽になった俺は、その後あらためて行った出席取りに専念できた。

俺のクラスの生徒の中、原作に出てきた少年は、ナルト、サスケの2人だけのようだ。特別扱いはいらないけどな。

ちなみに先ほどの出席取りで一番返事が良かったのは、意外な事にナルトではなく、原作では名も無き生徒 身能クズシ君、一般出身だ。非常に好感が持てる。ナルトは声はいいのだが、「ってばよ」の一言多いのが玉に瑕だ。

サスケはあの事件のせいなのだろうか、元気はなかった。

教師として何とかしてやりたいと思うが、あまりにも悲惨な状況のため、正直 何をやらばいいかわからない。時間ならまだあるはずだ。まずは俺自身がこの世界で生きていけるように強くならなければ。俺、このクラスの中で最弱かもしれないしね。

クラス全員の出席を取り終わったあと、夏休みの宿題を配ってまわった。

これは事前にイルカ先生か憑依前のミズキ先生が作成していたものだ。

忍者の宿題っていうのが気になってチラ見したら、小学校の宿題とかわらない感じであつた。こんなものなのだろうか。

問題なく宿題を配り終わり、この後は担任のケイチ先生から注意事項があるという旨の説明をして、クラスをあとにした。

職員室に帰る途中で気づいたが、ものすごく汗をかいていた。今日は楽な仕事と思っていたが、やっぱりハンパねえな教職って。

職員室に帰ったあとは、特にする事もないみたいだったので、机の引き出しから授業予定表なるものを見つけ、内容をメモしていった。その後は、ひたすら教科書探し。忍術ののに字も知らないので、頼るとしたらやはりコレしかないだろう。

そうこうしているうちに、時間は過ぎていき、昼になった。

すると、職員室で昼礼なるものが始まった。

なんとなく列に加わってみると、教頭先生と思われる忍者が現れ、いろいろと話をはじめた。

教頭忍者の話によれば、今日は職員も昼で終わり。帰りたい人は帰ってもよし。

下っ端の担任補佐忍者は職員室を掃除して帰れ。という事だそうだ。

その後、いそいそと掃除をしていると、我らがボス ケイチ先生がお帰りになられるようだったので、

「お疲れっした！」

と言ったら、

「、、、、ああ。」

と、朝の調子とは打って変わり、非常に元気がない様子でトボトボと職員室を出ていった。

具合でも悪いんだろうか。

職員室の窓拭きをしていると、後ろでイルカ先生が机を拭いていたので、家の事を聞いてみた。

ストレートに聞いてしまうと幻術返しをかけられそうなので、

1、家を知ってるか聞く

2、知ってたら昨日のお詫びに晩飯をおごるから家に来い、と言う。

3、イルカ先生を待ち伏せして一緒に帰ってもらう。

4、晩飯は家についたあと、その辺で奢る。

という作戦を立て、実行に移してみたら、1のところで

「隣じゃないっすか。」

とあきれた感じで言われた。

あそこは職員用のアパートなんだろう。

ポケットだらけのベストを調べてみたら、そのうちの一つから鍵らしき物が見つかった。

よかったよかった。

窓の外ではアカデミーの生徒達が門を出て行くのが見える。

掃除も終わったので、午前中に集めた資料やら教科書をまとめ、早く家に帰って勉強しようと思っていたら、校庭に出た所で金髪の少年に声をかけられた。

「ミズキ先生！」

うわ！びつくりした！

ナルト君か。もしかして、ずっと1人で待っていたのだろうか？足を止め、ナルトの方を見ると、手をもじもじさせながら恥ずかしそうに、しかし、最後は大きな声で

「俺ってばね。そ、その、分身の術ができないんだってばよ、。だから！ミズキ先生に今から術を教えて欲しいんだってばよ！」

蒼い目を大きく見開き、真剣な表情だった。

だけどね、ナルト君。術を教えて欲しいのは先生の方なんだってばよ。

「すまん！ナルト。せ、先生は今日は大事な用事があつてな、。今日はちよつと無理なんだ、。。」

「そっか、。。」

見るからにテンションが低くなるナルト。見ていた俺はついつい口がすべってしまった。

「でもな！明後日、いや、明日なら1日大丈夫だ！どうする？」
「えっ！？本当に！？」

「ああ、本当だ。」

「、、、、やる！明日 絶対やるってばよ！」

「よし！じゃあ場所はこの校庭だ。時間は9時！遅刻すんなよ。」

「わかったってばよ！明日9時！校庭！やったあ！！」

テンションが元に戻ったナルトは、全身で喜びを表現しながらアカデミーの門を出ていった。よほど嬉しかったのだろう。走っては手を振り、見えなくなるまでその動作を繰り返して帰っていった。

特別扱いはいしない。とは言ったが、やる気のある生徒を突き放すというのは、教師としてあるまじき行為だと思う。

今日はとにかく、分身の術の練習に費やそう。

明日の修業がうまくいくかはわからないが、少なくとも俺もナルトも、今日よりは少しだけレベルアップするはずだ。

そうと決まれば早く家に帰って、まずは教科書を読もうと、早足で家に帰っている途中、偶然 イルカ先生と出くわした。

「ミズキ先生！」

「イルカ先生。」

「さっきナルトに会いましたよ！明日は分身の術を教えてあげるそうで。」

「いやあゝ。自信は無いんですけどね。ホントに。」

「ナルトは素直ないい生徒なんですけど、術を教えるのがなかなかうまくいなくて、、、、」

イルカ先生はその後しばらく、ナルトという生徒について熱く語っていた。

四六時中学生の事を考えれる教師とは、まさにこういう人の事を言うのだろう。

見習わなくては。

イルカ先生はナルトについて一通り熱く語ったあと、

「そういえば、ナルトも言ってたんですけど、今日の大事な用事で、なんなんですか？」

普通　そういうこと聞くか？と　思ったが、お茶を濁す事にしたのだが、

「いやあ、ちょっと野暮用でして、。」

「えっ！？やばよう？野暮用ってなにするんですか？ねえ、ミズキ先生。」

野暮用という単語が悪かったのか、イルカ先生が妙に野暮用という言葉に反応してしまい、家につくまで野暮用の質問責めにあった。チャクラはまだ感じた事はないが、チャクラを削られるとは、こういう感じなんじゃないかと思った。

いいかげん、野暮用責めがウザくなってきたので、途中で話題を変えた。

「と、そういえば、イルカ先生。」

「なんです？ミズキ先生」

「今日のケイチ先生、昼過ぎから急に様子が悪いようでしたけど、大丈夫なんですかね？」

我々のボス　ケイチ先生の事だ。イルカ先生は、えっ　知らなかったの？みたいな顔をしたあと、

「ああ。、、、ケイチ先生はですね。ここだけの話し、。」

気が着いたら家のすぐ前まで帰ってきていた。2人ともポケットからアパートの鍵を取り出す。

「中盤くらいからダメなんですよ。」
「はあ？」

意味深な言葉を残し、イルカ先生はドアを開けると「お疲れっした」と中に消えていった。

憑依前ミズキの部屋は、意外と散らかっていた。

補習授業

午前9時 忍者アカデミー校庭。

アカデミーの生徒達は今日から夏休み。

学校の中には、宿直についている職員を除いて、人の気配はない。

木の葉の里は、夏真っ盛りという具合で、蝉の聲がけたたましく鳴り響いている。

そんな蝉の鳴き声がこだましているアカデミーの校庭には、教師らしき人物と生徒らしき子供の姿が。

分身の術が苦手で、個別に修業を見てもらった事になった、やる気のある生徒。

うずまきナルト。

中の人は、ついこないだこっちの世界に来たばかりで、忍術はわからないけど勢いで生徒の個別修業を引き受けてしまった教師。

ミズキ先生。

「よし！ナルト。約束の時間より少し前に校庭に来ていたのは感心だ！その気持ちが大変だぞ！」

「時間を守るのは当たり前だってばよ！」

うずまきナルト。

原作では問題児とされていたが、こうしてみると律儀な奴だと思えてくる。

忍者としては問題児なのかもしれないが、人間として問題児ならこういう約束には平気で遅れたり、すっぱかしたりする。

でも、ナルトの言うように時間を守るのは当たり前前の事なので、サクツと寝めるだけにとどめる。

「じゃあさつそく、分身の術の修業をはじめろ。まずは印の確認だ。最初はチャクラを使わないでいいから印だけ結んでみる。」

なぜ 忍者ド素人の俺が普通に教えているのかって？

答えは簡単。

昨日 家に帰ってから教科書を読み、教科書通りの印を結んで分身の術を試みてみたら、すんなりとできてしまったからだ。

なんだ、そりゃ。

と言われたい気持ちは分かる。

おそらく、憑依前ミズキの持っていた術の出し方やらチャクラの練り方を、体の細胞が覚えてしまっていると言った方がいいだろうか。

チャクラを練るにしても、術を出すにすても、「集中してイメージすれば、できる！」という事がわかった。

ただ、こんなあいまいな感覚ではナルトに分身の術を教える事は、とてもじゃないができない。

しかし、昨日 実践してわかった事は、「やったことは、体が覚えてる」という事だ。

効率的のいい修業とは言えないが、ナルトには術が失敗しても何回もやらせ、体で覚えてもらおうという、昭和の指導法で今回は望む事にした。

昨日は本当に分身の術しか勉強していないので、印の結び方などはバツチリだ。

ナルトから想定範囲外の質問が飛び出してきたときは、今日はなんとかごまかして、今日中に調べて明日また教えるとしよう。

教師として1日しかたっていないが、こんな俺にも、ちっぽけなプライドはあるのだ。

ホント肩書きってコワイね。

余談だが、分身の術をして自分の分身が出てきた時はとても感動した。

調子に乗って連発していたら、チャクラが切れて具合が悪くなってしまった。

なんと表現したらいいのか解らないが、酔っていない二日酔い状態みたいな感じ。

とにかく、動きたなくなってくるのだ。

チャクラを完全に使いきってしまったわければ、少し休んだり寝たりすると、わりと早く回復するので、なかなか都合のいいものなんだなと思う。

さあ、修業の話に戻ろう。

目の前ではナルトが、チャクラを使わずに印だけを結んでいる。見たところ変なところは無いと思う。

まさに教科書通りの印だ。

「よし、完璧な印だ。次はチャクラを入れてやってみろ！」

「わかったってばよ！」

ナルトはチャクラを練って印を結ぶ。

ナルトがチャクラを練ると、俺が術を出す時とは違う、禍々しいとでも言うのがふさわしい、独特な空気が流れているのが肌で感じた。

これが、九尾の力ってやつか。

短い気合いとともにナルトが術を発動させると、ナルトの隣には、何かわけのわからないモノが現れた。

しばらくの間、2人は何だかわけのわからないモノを見たまま、沈黙していた。

「俺が術を使うと、いつもこうなっちまうんだってば……。」

沈黙を破ったのは、ナルトの元氣のない言葉。

ここからが、今回の修業の目的なのだ。

「いや。もう少しだ。確実に完成に近づいていると思うぞ。」
「思いもよらない言葉だったのか、ナルトは驚いた表情でこっちを見ている。」

「今のは完全な失敗とは言わない。今、お前は分身を出しかけたん

だから！」

ナルトは印を解き、神妙な顔でこっちを見ている。さつき出てきた、何だかわけのわからないモノは、消えていた。俺はナルトに対し、激励を続ける。

「今はまだ、『何だかわからないモノ』しか出ないかもしれん。しかし！失敗しても練習を繰り返し返せば『ナルトっぽいモノ』になり、やがて『ナルト自身』になる！」

ナルト、適当な事しか言えなくてすまん。

情けない話だが、今の俺にはお前を叱咤激励して、失敗し続ける修業をさせる事しかできん。

「何回でも失敗しまくってやりかぶれ！体に覚えさせるんだ！」

やばい。熱くなって自分でも何を言ってるか解らなくなってきた。終始をつけるため、最後は憑依前の俺が好きだった、某マンガに出てくる老ボクサーの言葉を借りた。

「努力した奴が全員成功するとは限らん。しかし、成功する奴は全員努力している！成功は目の前だ！失敗しまくれナルト！」

カッコ良く決めたかったが、また熱くなって最後に変な事言ってしまった。

当のナルトは、しばらく俯いていたが、やがてブルブルと震えだし、

「○×□ ×ってばよー！！！！」

と、聞き取れない奇声を発し、再び分身の術の練習を始めた。

乗せられやすい奴で良かった。

「一体だけ分身を出すなんてケチケチすんなちゃ！10人くらい出す勢いでやらんか！」

「○×□ ×□ ってばよー！！」

熱くなっている奴を見るのは気持ちいい。ついついこちらも熱くなつて方言が出てしまう。ナルトも奇声で答えた。

失敗を繰り返すナルトに対し、時には檄を飛ばし、時には一緒に分身をしたり、俺はひたすら隣で叱咤激励をしていた。

その一方、チャクラを使いすぎたナルトが暴走したりしないように、時折 水を飲ませたり、ぶっかけたり。ケアも忘れないよう心がけた。あの狐さんが出てくるとおっかないしね。

ナルトがいい感じに分身の術を連発している時、俺の脳味噌に不安事項がふとよぎった。

「原作でナルトが術を使えるようになり出したのは、何かのイベントで狐さんと少し仲良くなったからじゃなかったっけ？」

もしそれが事実だったなら、俺が今やっている事はまったくの無駄になってしまっくんじゃないか？

夏なのに冷や汗が背中に流れるのがわかる。

やっちまっただか！？

だが、ここまできちまったら、燃えている奴を止めるなんて事はできねえ！

狐さんよ！ナルトの中に住んでんなら、こいつの努力もちつとは認めてやるうぜ。じゃなきゃあ、九尾の狐の名がすたるってモンよ！

と、相変わらずナルトに叱咤激励しつつ、狐さんとか神様とかいろんなものに祈っていた。

奇跡よ…起きてくれ！

しかし、

現実そんな甘いものではない訳でして、。。。

あれからぶつ通しで分身の術を失敗し続け、時刻はすでに5時を回ろうとしていた。

季節は夏なので、まだ辺りは明るいものの、けたたましく鳴り響いていた蝉の声は若干だが静かになり、日差しも昼間ほどの鋭さはなくなっていた。

驚くのはナルトの体力、チャクラの量、そして、根性である。

いくらチャクラの消費量が少なめな分身の術といえども、あれから昼飯も食わずに修業をやり続け、今もまだ失敗する術の修業を続けている。

途中、投げ出したりするんじゃないかと心配になったが、そんな心配をするなど本人に失礼だと思い直すほど、只ひたすらに一つの術の修業を続けていた。

こいつ、術なんか使えなくてもフィジカルとメンタルだけで、忍者できちゃうんじゃないのか？と思えてくる。

叱咤激励し続けていたとはいえ、ナルトと比べると遥かに術の使用回数が少ない俺の方が、チャクラが切れかけて具合が悪くなりそうだった。

「ナルト、残念だが、、もういい時間だ。今日のところはこの辺にしておこう..。」

「まだまだ！まだまだやれるんだってばよ！」

ナルトのその根性には本当に恐れいる。しかし、修業の目的を『成功するために回数をこなす』事から、『失敗してひたすら回数をこなす』事にはき違えかけているので、ここは一旦強制的にでも止めさせる事にする。

こうなってしまったのは俺のせいなのだが..。

ただ、『何だかわけのわからないモノ』が、今は『言われてみれば

ナルトみたいなモノ』に進化していたのが、唯一の救いだ。

少しずついい。少しずつお前の忍道を極めていってくれ…。

「修業は今日だけじゃないぞ。明日も見てやるから、ここまでにしよう。…ラーメンおごってやるから。腹減ってるだろ?」

「先生がそこまで言うなら仕方ないってばよ。」

聞き分けのいい子だ…。

夕方の校庭には風が時折入り込み、体を通り過ぎていく風が心地よく感じる。

2人並んで校庭をでようとした時、ナルトが唐突にこんな事を聞いてきた。

「あつ!そう言えば先生!昨日 言って大事な用事って一体何だったんだってばよ!」

やはり気になるのか…。

「ああ…。昨日は悪かったな。昨日はちょっと野暮用があつてな。」

ぶっ続けで行った修業の疲労もあり、俺はついポロリと「野暮用」という単語を口走ってしまった。

昨日のイルカ先生からの質問責めが脳裏によぎる。

これからまた昨日の事が繰り返されるのかと思いきや、

「ふん。やばよう かあ…。 なら、仕方ないんだってばよ。」

意外な返答。さらに、

「先生もいろいろと大変なんだってばね。」

同情された。

「ナルト。…夕焼けが、きれいだな…。」

激動の2日間を思い出し、涙が出そうになったが、夕焼けに見入るフリをして耐える。

夏の夕焼けは、2人を優しく包んでいるように思えた。

結論。

ナルトの方が大人だ。

夏の思い出

昨日、校庭を出てしばらくたった後、ナルトは分身の術を成功させた。

なんだ、そりゃ。

と、言われる前にどうか話を聞いて欲しい。

事の顛末はこうだ。

あれから、腹を空かした俺とナルトは、一樂ラーメンを目指して歩いていた。

その時の俺とナルトは、朝から夕方まで共に修業で汗を流していたせいか、先生と生徒という垣根を越えた、奇妙な連帯感が芽生えていた。

言ってしまえば、「今日は2人とも一緒に頑張ったから、今なら何を言ってもいいんじゃない？」的な空気が2人の間には流れていたのだ。

「ナルト君。君は『お色気の術』なるものなら使えと、イルカ先生に聞いたんだが…。それは本当なのかね？」

「ん？お色気の術ならできるんだってばよ。」

「ちょっと先生に見せてみなさい。」

完全に教師という立場を忘れた発言だった。

この場にイルカ先生がいようものなら、大変な事になっていたと思う。

「ミズキ先生が見たいっていうなら、見せてやるってばよ。」

ナルトはそう言うと、木の葉を額に当て、お色気の術の印を結んだ。煙を巻き上げ、姿を表したのは、金髪ロングのグラマラスな美女だった。

「じゃ〜ん！どうだってばよ！お色気の術！」

金髪ロングはクネクネとポーズをとっている。

ほうほうほう…。

金髪ロングに上からボンツキュツボンツ、か。ナルトの思う、理想の女子とはこういう感じなんだな。

「…？アレ？イルカ先生はイチコロだったのに、ミズキ先生には効かないんだってばよ。」

金髪ロングは眉間にしわをよせ、何がダメなのか悩んでいるようだ。

悪くはない。悪くはないが、色気ではない。

それが、俺がお色気の術を見て脳殺されなかった理由だ。

金髪ロングのボンツキュツボンツも悪くはないのだが、それでは格好が良すぎてエ…色気、は感じない。

「ナルト君。その術を先生に教えてみなさい。先生が本当のエ…色気を見せてあげよう。」

ほうほう。印はこうして結んで…。こうか。

変化の術を知らない俺は、里の往来で金髪ロングから変化の術を教えてもらった。

先ほど述べた通り、先生と生徒の垣根は越えているのだ。

「あとは、イメージが大事だってだよ！」

金髪ロングからの確な助言をいただいた。

日本の文化を色濃く出している木の葉の里。

そして、里の人間は金髪、銀髪、白髪等と存在し、黄色人種だけのものとはいい切れない。

そんな独特な文化を持つ木の葉の里で、もつとも色気を感じる女性とは…。

前にいた世界では、『A V ザムライ』という異名を持っていた俺がイメージしたのはっ！

チャクラを練り、持てる脳細胞をフルに回転させてお色気の術を發動させた。

「…すげえ。ただ立っているだけなのに…何か、とてつもなくいやらしいんだってばよ！」

それはそうだ。体一本で勝負している世界。変化の術といえども、存在感、オーラが違うのだ。

金髪ロングは術が外れ、驚愕しているナルトの姿になっていた。

「で、出るとこ出ときゃいいってもんじゃ、なかったんだ…てばよ。」

「

なかなか鋭いぞナルト君。

しかし、これはまだ序の口。

俺はおもむろに、分身の術の印を結んだ。

「なっ！ただ1人増えただけなのに…。不思議なんだってばよこの感覚っ！…くっ来るなっ！こっち来んなああっ！」

微笑みを浮かべながら近づこうとしたら、ナルトは後方に飛び退き距離を取った。

九尾の嗅覚で危険を察知したのだろうか、手にはクナイを握りこちらに向けて照準していた。

尻尾みたいなのが一瞬見えたのは、きつと気のせいだろう。

俺はお色気分身の術を解いた。

「これが、お色気の術だ。」

術を解いて元に戻った俺の姿を見て、ナルトは安心したのか糸が切れたマリオネットのようになって、その場にへたりこんだ。

ナルトはしばらく肩で息をして、呼吸を整えていた。

その呼吸が収まりつつあった時、何か意を決したかのように俺を見て、口を開いた。

「ミ、ミズキ先生っ！」

「なんだ？」

「こ、これからは、師匠と呼ばせてくれればよ！」

お前の師匠は違う人だぞ。

「俺もっ！お色気分身の術をやってみるってばよ！」

「お前が俺に言った通り、この術はイメージが大事だ。金髪ロングが2人！イメージしてやってみろ！」
そしたら普通にできていた。

「っ！？ナルト！お前、今 分身の術を…」

「あゝ！違う違う！違うんだってば！こんなんじゃ師匠を脳殺…」

「いやいや。とりあえずナルト。術を解こう。な。」

ナルトをなだめると、悔しそうに術を解き、もとの姿に戻った。

「…で、今 お前はあれだけできなかった分身の術をあっさりや

ってしまった訳なのだが…。なぜなんだ？」

「師匠がイメージが大事って言ったから、イメージしたらできたんだってだよ。」

ナルトはさも当然つといった顔で言った。

イメージが大事って最初に言ったのはお前なんだがな。

…イメージ！？

俺の脳みそに本日何度目かとなる、嫌な予感がよぎる。

「ナルト。正直に言ってみろ。普通の姿で分身の術をするとき、何かイメージしてるか？」

「そりゃあ、せっかく分身を出すんだから、四代目みたいに強くてカッコいいヤツを…。」

俺は、糸が切れたマリオネットのように、その場にへたり込んだ。

「師匠！？大丈夫かってば！」

ナルトが心配そうに駆け寄ってくる。

ああ…ナルトよ。

お前が日中、あれだけ頑張って練習していたのは分身の術じゃない…。

強くてカッコいい、四代目火影に変化ではなく、出すイメージ…

そりゃアンタ、穢土転生って術だよ…。

今日1日の行動の一つ一つが、俺の脳内を走馬灯のように駆け巡っていく。

悲しみ、絶望感、やるせなさ…様々な感情が容赦なく打ち寄せてくる。

怒る気力もなくなった俺は静かにナルトに語りかけた。

「…いいか、ナルト。分身っていう言葉の意味はな…。」

ナルトに分身という単語について、幼児に言い聞かせるよう、噛んで含ませるよう、説明したあと、今の姿のままで分身をするように言った。

チャクラを練って、印を結んで、イメージして、…、ホラ できた。

目の前では、分身の術に成功して無邪気に喜んでいるナルトの姿。俺はへたり込んだまま、死んだ魚のような目で、その光景を見ていた。

ここは、ナルトの成長を誉めるべきなんだろうか…。

「…ナルト。よく頑張った…。ラーメン…好きなだけ食べていいぞ…。」

「やったってばよ！師匠　ありがとう！大好きっ！」

校庭を出てからどのくらい時間がたっていたのだろう。
辺りの景色は夕方から夜の景色へと変わり始めていた。

蝉の声は既に聞こえなくなり、周囲は鈴虫が心地よい音を出している。

俺は、喜びはしゃいでいるナルトに引きずられるように、一楽へと向かっていった。

と、こういう訳なんだわさ。

ちなみに、一楽へ行ったナルトの食欲は、昼飯を食べていないというだけあって半端なく、子供が食べるとは思えない量をペロリと平らげていった。

気になるお支払いの方は、何の為に遣おうと思っていたかはわからないが、憑依前ミスキが小銭を貯め込んでいたので、問題はなかった。

うまいラーメンを食べて、幾分か気力の回復した俺は、一楽を出た帰り道、木の葉の通りをナルトと話しながら帰った。

「ナルトはやっぱり、火影になるのが夢か？」

「うん！俺ってば、ぜってえ火影になるんだってばよ！」

月明かりが2人を照らしている。火影宣言をしたナルトの顔は、月の光に反射されてかいつもよりも光って見える。

「じゃあさ！じゃあさ！師匠の夢も教えてくれってばよ！」

「ハハハ。俺の夢かあ。」

俺の夢か。何だろうなあ。

こつちの世界にきて日も浅い（2日です）から、考えもしなかったな。

「じゃあ、俺の夢はアカデミーの校長になる事かなあ…。」

「いい！それ、すげーいいってばよ！俺が火影で、師匠が校長…！
叶えよう！絶対叶えてやるってばよ！」

「頑張って叶えようなあ。…あと、先生の事を師匠と言うのはヤメナサイ。」

何気なく言ってしまった感のある俺の夢だが、それを聞いて喜んでくれる人がいるというのは、嬉しい。

俺はともかく、ナルト。

お前は今の気持ちを忘れずに、このままお前の忍道を貫いていけば、必ずその夢は叶うよ。

この物語の主人公だしな。

「あっ！あと1つ！あともう1つ夢があるんだってばよ！」

「おっ、まだ夢があるのか？」

「お色気の術で師匠の頭をショートさせる事！」

「ハハ、ナルトらしいな。あと、師匠 言つの ヤメロ。」

ニシシといった顔でナルトが笑う。俺も笑った。

「でも、ナルトのお色気分身じゃあ、先生の脳みそはショートしないだろうなあ。」

「でも、やってやるんだってばよ！」

「ナルトがもしも、お色気影分身を使えば、間違いなく先生の脳みそはショートするんだろうけど……。」

「お色気……かげ？何なんだってばソレ？」

「分身は己の姿を映し出す残像。影分身は、実体がともなう。わかりやく言えば、本物の人間が分身で出てくる。この術がお色気の術と合わさった時の破壊力は……子供のお前でもわかるだろ？」

「お色気……かげぶんしん。影分身！破壊力は、よくわかんねえけど、すげえ！教えてくれってばよ！影分身！」

「先生は残念ながら影分身は使えないから、ナルトに教えてあげることができないんだよ……。影分身は高等忍術だからな。」

「…そつかあ。」

「…まあ、今日 ナルトが見せた努力と根性があれば、いつか絶対できるようになるよ。」

「いつか絶対 影分身をモノにしてやるってばよ！」

「その意気だ！ナルト。…術のイメージ、忘れるなよ！」

帰り道は2人の自宅への分岐点へとさしかかっていた。

「そういえば、明日も修行を見てやると言ったものの、分身の術は完成したし…。明日どうする？」

ナルトはしばらく考えた後、

「明日の修行は、いいってばよ！影分身は先生に内緒で練習してびつくりさせたいし…。何より、先生ってば今日は疲れたみたいだし、明日はゆっくり休めばいいってば！」

生徒に氣遣われてしまったようだ。

「そうか…。じゃあ、また修行を見て欲しくなったらいつでも言えよ！じゃあな！」

「次 先生に見せる時は、お色気影分身が完成した時だってばよ！先生 サヨナラ！」

ナルトは大きく手を振って、家路を駆けて行く。

走りながら

（今日はなんだか凄く楽しかったってばよ！）

今日の1日という日を振り返り、ニシシと思い出し笑いをしていた。

（ミズキ先生つてば、ちょっと前…2日前くらいからか？だいぶ雰囲気が変わったんだってばよ。）

今までのミズキ先生は、表向きはナルトに優しく接していても、どこかナルトを軽蔑するような目で見ていた。

そう、里の人がナルトを見る時と同じ目で…

ナルトが校庭でミズキに修行を見てくれるよう頼んだのは、ナルトの感か、九尾の嗅覚が、敏感に今までのミズキとは違う事を察知したからであろう。

（術が失敗した時も、ずっと励ましてくれてたんだってばよ…。うれしかったなあ。）

いつもは1人で寂しい帰り道が、今日は1人でも楽しく感じる。

（術が成功した時は、何か反応が薄い気がしたけど…奢ってくれたラーメンはすげえうまかったってばよ！）

我慢しようとしても、今日という1日のでき事を次々と思い出してしまい、笑みをこらえる事ができない。

（俺が火影で… 先生が校長！この夢、絶対叶えてやるってばよ！

…って待てよ。今のアカデミーの校長って確か火影のじいさんだつてば…。

って事は、ミズキ先生ってば、やっぱり表向きは優しく接しておいで、裏じゃ虎視眈々と火影の座を狙ってるんだってばよ！

とんでもねえタヌキだったんだってば！結局は自分が助かる事しか考えない、とんだ偽善者なんだってば！

俺が先生の事を師匠と呼ぶのをあそこまで拒んだのも、きっと俺をライバルとして認定したからなんだってば！

今日の事はすげえうれしかったけど、火影には俺が絶対なるんだってば！

そうと分かったら、何が何でもお色気影分身をモノにしてミズキ先生にギャフンと言わせてやるんだってば！

明日からお色気、いや、まずは影分身の修行なんだってばよー！！（

変に知恵が回るこのナルト、自宅に着いたときには、努力するべくトルが少し違う方向に向いていた。

それでも、木の葉の夜は明るかった。

夏の思い出2

アカデミーの生徒達が夏休みを過ごしている間、俺は自宅でひたすら教科書を読んでは実践してみるという日々を過ごしていた。

さすが、『性格が問題なけりやもつと出世できるかも』と謳われた憑依前ミズキ先生。

残してくれた身体能力的な産物は大きく、教科書に書いてあるような事なら、それほど苦勞する事はなく習得できた。

こつちの世界に来てから、人間の身体能力という事に関しては本当に驚く事が多い。

試しにやってみた助走なしのジャンプで、自分の背丈を軽く越えてしまった時など、驚きを通り越して笑ってしまった。

すべての身体能力においてこんな感じで、前にいた世界の常識を覆しているため、慣れるまでにはかなり時間がかかった。

しかし、せつかく残してくれた憑依前ミズキの産物を、無駄にしまつてはもつたいたないので、術の修行の間には体を動かして、体力を今よりも上げるとまではいかないが、現状を維持できるように心がけていった。

意外と難しかったのが投擲術で、こればかりは身体能力というよりも感覚が重要なため、毎日コツコツと投げて感覚を掴んでいくしかなかった。

現段階での俺の投擲技術は、止まっている目標ならなんとか当てれる。というレベルだ。

教師としてどうなの？と言われそんな無様な投擲技術なのだが、幸いな事に我が木の葉アカデミーは、教師の得意分野を生徒に教えるというシステム。

投擲技術の授業は、右投げ本格派のケイチ先生が受け持っているため、しばらくの間は、なんとかごまかせるだろう。

ケイチ先生が中盤で崩れなければの話だが…。

しかし、いつまでもごまかしていく訳にはいけないので、時間はかかるがコツコツと練習をしていくしかない。

修行を始めた頃は、『手っ取り早く簡単に強くなれるかも！』という淡い期待を抱いていたが、甘い考えのようでした。

憑依前ミズキの身体能力は別として、やはりコツコツと努力して得たものが、最終的に我が身を助けるという訳で。

憑依前ミズキは身体能力だけではなく、『知らない産物』も含めて俺に残っていた。

その知らない産物とは、霧隠れとの関係。憑依前水木は既に霧の連中と通じていたらしい。

最初に“もしかして”と思ったのは、夏休みに入ってしまった頃だった。

匿名で手紙が送られてきて、封を切って読んでみれば、暗号のような変てこ文字が羅列されている手紙だった。

結局その手紙は、持っていて気味が悪かったので、ビリビリに破いて捨ててしまったのだが、その時感じた“もしかして”が確信になったのは、夏休みも半ばにさしかかったお歳暮の頃。

またしても匿名で、小包が送られてきた。

包みを開けてみれば、中に入っていたのは大きな鮭だった。

夏なので腐りかけていて開けた瞬間に嫌なにおいが部屋に広がった。

鮭の口には、どこでどうやって手に入れたのだろうか、木の葉の額当てがくわえられている。

これは、まぎれもなく、

「オマエ、ウラギッタラ、シズメテ鮭ノエサニシチャウヨ。」

というメッセージであろう。

凄く怖いんですけど、このお歳暮。霧の人はマフィアなのか。

今の時点で霧とミズキが繋がる点といたら、やはり例の巻物の事だと思う。

時期はおそらく今のアカデミーの生徒が卒業する頃。

原作のようにナルトを騙して巻物を持ってこさせるなんて考えはしていないし、憑依した今となっては、巻物を連中にくれてやるつもりも無い。

どうしたものかと考えてはみるが、いい案を思いつくわけでもなく、今はひたすら己を鍛えていく事くらいしか思いつかない。

その時がきても、霧の連中に殺されてしまわないように。

ちなみに、送られてきた腐った鮭は、裏の空き地で覚えたての火遁で燃やした。

そうこうして、夏休みも終わりに近づいていき、あと残すところ一週間となった。

俺は、宿直の当番がまわってきたので、アカデミーにいた。

アカデミーと言われるだけあって、職員用の書庫にはたくさん教科書が置いてあった。

さすがに禁術とまではいかないが、幅広く術についてまとめられた本が置いてあり、その中でも、口寄せ関連の本を中心に読みあさっていた。

「ミズキ先生ッ！」

夕方頃、廊下をけたたましく走る音とともに、ナルトが叫んでいる声が響いた。

「おっ。ナルトか。どうしたんだ休み中に？あと廊下は走るな。」

「つ、ついに！完成したんだってばよ！真・お色気の術！」

「ほう…。」

場所を変えて校庭に。辺りは薄暗くなりはじめている。

ナルト曰わく、真・お色気の術が完成したので、真っ先にミズキ先生に見てもらおうと寮に行ったら、宿直で学校に行っていると隣のイルカ先生に言われたので、学校まで走ってきた。

イルカ先生にも見せようと思ったが、まずはミズキ師匠から先に。

「話はわかった。では、見せてもらおうか、真・お色気の術を！」

「ミズキ先生を絶対に悩殺してやるってばよ！」

「…俺は厳しいぞ、ナルト。」

ナルトはチャクラを練りはじめ、印を結んだ。

…ん？なんか見た事ない印だな。教科書には乗っていない…。

ナルトが結んでいる不思議な印を観察していると、術が完成したのか、煙を巻き上げて美女が数体出現した。

「どうだってばよ！」

数体の美女は、悩ましいポージングをとっている。

ビジュアルを従来の金髪ボン！キュ！ボン！ではなく、どこことなく柚木ティナに似せてきているのが、評価のポイントだろう。俺のツ

ボをよく研究している。どこで調べたんだろう。

しかし、あくまでも分身の術。悩殺とまではいかない。

「…うん。ナルト！惜しかったな！美女についてよく研究しているようだが、まだまだ悩殺とまではいかないな！」

「悩殺は、これからだってだよ！」

「えっ！？」

次の瞬間、俺は、幻術にでもかけられているかのような衝撃を受けた。

柚木似の美女達が、艶めかしい動きで近寄ってきて、体をすり寄せてきているのだ。

まぎれもない、実体として。

—なんで！？ナルトが影分身を覚えるのは、確かあの時だったはず。なぜ今、ナルトは影分身をしている？

「…あれ？動かなくなっただってだよ。おい。」

ナルトが変化した柚木ティナ似の美女は、混乱で動けなくなっている俺をつんつんしている。

「ナ、ナルト。この術は…」

「真・お色気の術だってだよ！」

「まさかお前！禁術指定の巻物を盗んだんじゃ…」

「えっ？禁術指定の巻物？何ですかそれ？」

その後、変化の術を解いたナルトから、いかにしてこの真・お色気の術が完成に至ったあらましを聞いた。

それは、驚愕の事実であった。

ナルト曰わく。

分身の術を教えてもらった翌日から、さっそく真・お色気の術を完成させるために、影分身の練習を独自に開始。とりあえず、イメージだけはバッチリにして、分身の術で練習する。

しかし、印が違ったため、術は当然のごとく分身しかでない。でも、やる。やり続けた。

やがて印を結びすぎて指がつる。

それでも、やった。

指がつっているため、変な印の結び方になったら、変な分身が出た。

ここら辺で、印の結び方に関係あるって気付いたんだってばよ！（ガッツポーズ）

次の日から、分身の術の印をベースにして、印の結び方を微妙に変えながら、影分身の練習を開始。

ひたすら印を結び続ける日々。ついに、昨日 正解（影分身の正しい印）にたどり着いたんだってばよ！（ガッツポーズ）

「絶対ミズキ先生は鼻血ブーだと思ったんだけど、やっぱり師匠は厳しいってばよ。」

何週間か前までは、分身の術もろくにできなかった少年は、己の知恵と努力のみで、禁術である影分身を身につけた。

莫大なチャクラ量を持っていなければ、この方法で練習していつて影分身を習得するには何年かかる事だろう。

少年は頭の後ろで手を組んで、残念がっている。

「天才だ。」

「えっ？」

「ナルト！お前は落ちこぼれなんかじゃない！天才だ！」

ナルトの両肩に手をかけ、俺は考えられるだけの讃辞を言った。

「ついにやったな！影分身！自分自身の力で！この夏休み中、どれだけ練習したんだ。すごいぞ！お前は木の葉が誇る天才だ！」

「俺、あんまり人から褒められ慣れてないから、そこまで持ち上げられると気味が悪いってばよ。」

「正直な事を言う奴だ！その術は一生の宝だぞ！大事にしるよ？練習を怠るな！」

「それはわかってるってばよ！」

俺は本当に嬉しかった。

まさかナルトがこんな短期間で、それも自分の力で影分身を習得してしまうとは思ってもみななかったからだ。

ここ最近、やはりあの事件を起こさない限りナルトは影分身を習得できないのではと悩んでいた。

原作の補正とやらも効いたのだろうか。それでも、ナルトは、実にナルトらしいやり方で、影分身を己のものにしたのだ。

失敗を繰り返しながら、それでも練習を続けて結果を出したこの影分身。ナルトの忍人生において、この夏の経験は、ナルトの血となり肉となって、今後に生かされていくのは間違いないだろう。

「一楽のラーメン奢ってやる！と、言いたい所だが、見ての通り先生は宿直当番。…カップラーメンならあるけど、食べてくか？」

「一楽のラーメンも好きだけど、カップラーメンもなかなか良いもんだってだよ！」

2人並んで、宿直室に向かって校庭を歩く。

横で歩いている金髪の人才忍者について、ある考えがよぎった。

「なあ、ナルト。ちょっと試したい術があるんだけど、協力してくれるか？」

日中、読みふけていた口寄せの術についてだ。

口寄せに必要なのは、契約の巻物と契約者の血、術式。

通常は契約の巻物で契約するのだが、その巻物が燃やされたりすると、契約者が消えてしまう。

便利な術なのだが、けっこう危険な術なのだ。

飛雷神をあみだした四代目の息子であるナルトなら、何らかの形でも人間を口寄せする事ができれば、要領をつかめるかもしれないという、俺の思いつきであった。

「この契約の巻物を使って、俺を口寄せしてみる。」

少し前のナルトならば、そんな事をやらせたら、見ず知らずの場所にすっ飛ばされる危険が大であった訳だが、今やナルトは自らの努力で影分身を編み出した天才忍者。

完全に勘なのだが、口寄せ自体ならきつとうまくいく、という確信があった。

「俺は既に契約してある。後はお前の血を…」

不思議そうな顔をしているナルトに口寄せの説明を続ける。

「少し痛いけど、傷はすぐ治る。あと、印は…こうだ。ミスったら俺はどこかに飛んでしまう。だが、心配するな。俺がどこかに消えても、落ち着いて術を連発しろ。今日中には帰ってくると思う。」

ナルトの前に巻物を起き、10mほどの距離をとる。

大丈夫だと思っけていても、実際にこの実験を行う前となると、緊張してくる。ジェットコースターに乗る前みたいな心境だ。

失敗してどこかに飛ばされてしまうなら、元の世界に飛ばしてもらったりはできないのだろうか。

「よし！いいぞナルト！やってみろ！」

いまだに不思議そうな顔をしているナルトは、先ほど教えた印を結びはじめる。

ジェットコースターに乗って、高い所にゆっくりと登っていく時みたいな心境だ。あとは野となれ、山となれ。俺は目を瞑った。

ナルトは不思議そうな顔をしたまま、印の結びを完成させ、口寄せの術を発動させた。

一瞬、無重力を感じたあと、両足に地面を感じ、どこかに立っている事がわかる。

静かに目を開けると、目の前には不思議そうな顔をして俺を見ているナルトの姿があった。

どうやら術は一発で成功したようだ。

実験開始前は、下手したらどこかに飛ばされるんじゃないかと、色々心配していたが、俺の取り越し苦労だったようだ。

「…どうだ？」

「…？何がどうなんだってば？」

「口寄せを成功したわけなんだが、どんな気分だ？」

「どんな気分って…。なるべくしてなった結果なんだから、別にどうって事ないってばよ？」

「そ、そうか…。」

現実的なナルトの意見を聞いて、俺達はカップラーメンを食べるた

めに学校の宿直に向かった。

辺りはすっかり暗くなり、蝉も鳴きやんで時折吹いている風が昼間と変わって涼しく感じる。

「…まあ、さっきのは口寄せの術というやつだ。一発で成功させたのはさすがだ。あの感覚を忘れるなよ！」

「どうせならミズキ先生じゃなくて、ボンキュボンな女子を口寄せしてみたいもんだってばよ。」

「ははは。この変態め。」

宿直室につくと、ラーメンを作る準備に取り組かかる。

宿直室には、何種類ものカップラーメンが常備されている。

どれでも好きなもの選んで食っていいぞ、とナルトに声をかけたら神妙な顔をしたナルトがいた。

「…先生。

ここは一つ、俺の言う通りにしてもらえませんか？…飛びっきりのカップラーメンを食べさせてやるってばよ！」

そして、ナルトのラーメンワールドが展開された。

「麺はコレ！この会社！汁はコレで、具はその会社。もったいないって思つかもしれないけど、絶対に損はさせないってばよ！…熱湯3分って書いてあるけど、厳密には2分40からかき回して食べるのがベスト！」

ナルトは意外と、研究者とかに向いているんじゃないかと思う。

ラーメンは、レトルトと思えないおいしさだった。

お約束だが、ラーメンの汁を契約の巻物にこぼして

「あちい！あちい！」

つてのもやった、木の葉の夏の思い出。

後日、契約の解き方もわかったので、巻物との契約は解除した。

シュレッダーとかされたら危ないしね。

授業

アカデミーの夏休みも終わり、今日から生徒達の授業が始まる。

夏休み中は、忍術やら体術といった事をひたすら修行する日々だった。

憑依前のミズキさんの能力が元々高いという事にも助けられてか、少なくとも生徒の前で恥をかく事は無いレベルまできたんじゃないか、と思う今日この頃。

しかし、霧の里と思われる人から届けられる意味不明な暗号文や脅迫めいた小包は、相変わらず定期的に郵送されてきている。

いつその事、火影様にチクってやろうかと思ったが、チクった所で一時的な我が身の保身は図れても、これから先は疑いの目を持って見られる事は間違いない。下手をすれば、うちは警備隊にパクられて、木の葉が誇る拷問番長、イビキさんにあんな事やこんな事をされてしまうかもしれない。

そう思うと迂闊に行動する事はできず、愚策と言われるが今は静観するしかできなかった。

いずれにせよ、期限はアカデミー卒業の日まで。

その時がきて、俺がやる事は…。

すでに腹は決まっている。

暗号文の文字が日に日に雑になっている所に、差出人の怒りが伺い知れる。

差出人に何らかの返信をしたくても、何を書いてんのか全然わかん

ないし。

この世界では、気性が荒いと言われている差出人が、アカデミーの卒業日まで我慢してくれる事を祈ろう。

「よし、今から投擲術の授業をはじめろぞ。」

時刻は昼、俺は生徒達の前でクナイを持ち、投擲術の概要を説明している。

そう、授業初デビューだ。

なぜ、担任補佐の俺が授業をしているのかというと、理由は簡単。正担任であるケイチ先生が昼前くらいから調子を崩されて、俺が交代で授業をする事になったのだ。

午前中は絶好調であっただけに、急にどうしてしまったんだろう。

病気じゃなきゃいいんだけど…。

昼から交代で授業をする事は、午前中が終わる前に、教頭忍者から知らされていた。

つまり、バタバタではあったが、準備をする時間はあった。

教科書を読んで授業内容の予習などはできた。そして俺はこの記念すべき初授業に、ある『秘策』を持って望む事を決意した。

ある『秘策』とは、俺が憑依する前に住んでいた世界で鉄板と言われるネタ。

『どぞ、どぞ』だ。

3人が1人ずつ手を挙げていって、最後に手を挙げた人がアレする事になるやつ。

なぜこんな事をするのかと言うと、隣の部屋のイルカ先生が

「生徒が楽しいと感じる教育は、いい教育である！」

と、こないだ一緒に酒飲んだ時に豪語していたからである。

本人はきつと、授業内容の事を言っているのだと思う。

俺はこつちの世界に来てから日も浅く、いかんせん忍者としても、教師としても経験が無いため、授業内容はいつぱいいいなものになってしまおうと思われる。

ならばせめて、授業のつかかりの所だけでも生徒達が楽しく思えるようにと、この鉄板ネタを使う事を決心したのである。

このネタを行うには協力者が必要なので、授業の予習もそこに、2人の生徒を呼び出した。

1人はナルト。

もう1人は田岡カケル君といって、攻めて良し守って良しの、なかなか優秀な生徒を呼んだ。最初はナルトとサスケでこのネタをやつて、2人の距離を縮めてみようかと思ったが、さすがに無理だろと思ひ直し、万能なカケル君を起用する事にした。

3人目に手を挙げてアレするおいしい役は、熟慮のすえに俺自らが行う事にした。

鉄板なのでウケる事は間違いないのだが、万が一にもスベってしまった場合、3人目が生徒だとイジメの対象になる可能性を考慮したのだ。

呼び出した2人の生徒を人気の無い所まで連れ出し、我が秘策を打ち明けた。

目立ちたがりのナルトは2つ返事で引き受けてくれたが、カケル君の反応はイマイチであった。

しかし、誠意を持ってこの鉄板ネタの素晴らしさを訴えたら、しぶしぶではあったが最後には了承してくれた。感謝。

昼休み中に授業の準備を終えた俺は、教材のクナイと『秘策』を持ち、記念すべき授業へと向かったのだ。

そして今、緊張しながらも投擲術の概要説明を終え、授業は生徒達に実際に投げてもらう段階に入った。

秘策を授けた2人の生徒に『次、やるぞ』と目で合図を送る。

2人は心得たと言わんばかりに静かに頷く。

ついに、時空を越え、この異世界の地で、秘策の鉄板ネタを披露する時がきたのだ。

「よし！ではみんなに実際に投げてもらおう！その前に、見本を見せるんだけど、、我こそはと自信のある人！」

「俺がやるってばよ！！」

1人目のナルトが元気よく手を挙げる。

いいタイミングだ。次は…

「俺がやる。」

カケル君が手を挙げる。

元気が無いのが少し気になるが、タイミング的にはいい感じた。そして…

「俺がやる！」

「どぞ！」

すべった。

何回かリハをやっただけあって、3人のタイミングは非常に良かったと思うのだが、どうにもこうにもスベってしまったようだ。

俺は、手を挙げて後ろにのけぞった体勢のまま、しばらく固まっていた。

重い空気が流れる。

ゆっくりと体勢を立て直しながら、生徒達の方に向き直る。

生徒達のほとんどが、鳩が豆鉄砲をくらったような目で俺を見ていた。

授業を…しなきゃ…。

協力してくれた2人には誠に申し訳なく思う。後で謝ろう。こんなはずじゃ、なかったんだ…。

しかし、まったく反応が無い生徒達の中で、1人だけ他の生徒達とは違う反応を見せる生徒がいた。

サスケだ。

サスケが下を向いてプルプル震えている。

ツボにでも入ってるのだろうか。
どうでもいい。

俺は…授業をやらなくちゃ。

「じゃあ、先生が最初に見本を見せまゝす。よく見ておくよーに。」

重くなった空気を払拭するために、努めて明るい口調で言った言葉が、夏の校庭にむなしく響いた。

クナイを持った俺に生徒達の視線が集まる。

足がガクガクしそうになるが、必死に震えを隠す。

サスケはまだプルプルしていた。

知らねえ。

修行に明け暮れた夏休みを思い出せ！

教師が緊張をすると、生徒達にも伝わってしまう。

先程の失敗もあり、今の時点でも充分に緊張しているが、努めて余

裕のあるフリをする。

深呼吸の一つもしておきたいところだが、生徒が見ている手前、それもない。

投擲の動作に入り、前方に立っている的に狙いをつける。
手が汗ばんでいるのが気になるが、もう後には引けない。

夏休み中にやって来た事を思い出しながら、クナイを投げた。

汗ばんだ手で投げられたクナイは、風を切りながら的にめがけて飛んでいき、結果としては見事に命中した。

必殺の『今は悪い見本だぞ。』は、使わなくてすんだようだ。

大きくため息をついてみたいが、生徒に見せた手本がうまくいき、安堵のため息をつく教師なんてどこにいる。

「今のような感じだ。それでは次はみんなに投げてもらう。ケガするから遊んだりしないぞ。」

的から目を外して生徒達の方に向き直る。

教材として準備していたクナイやら手裏剣を、生徒達に配っていた。

忍びと言えど、今は子供。

何をしでかさかわからないので、注意して生徒達を観ておく。

「みんな持ったみたいだな。では、あの的にめがけて順番に投げてみよう！コツは、よく狙って何回も投げる事だ！」

無事に命中して気分を持ち直した俺は、コツになっているかどうかは分からないが、こつちの世界にきて体得しえたコツを生徒達

に伝える。得物を持った生徒達が的にめがけて投擲していく。幼い頃からこういった事をしている為か、生徒達の投擲水準は高いと感じた。

大きく外すような生徒はいなく、みんな次々と的に命中させていく。外してしまう生徒も中にはいたが、原因の大半は緊張からくるものだとしてとれた。

一息入れさせたり、『何回でも投げていいよ。』的な事を言っただけで、外していた生徒も命中しだした。

ブルブルサスケの番だ。

教科書通りのキレイなフォームから投げられたクナイは、的に真ん中に命中した。

彼も気分を持ち直したのだろう。

見ただけで、かなり投げ込んでいる事がわかる。

的に真ん中に命中したのを確認して、『フン』とか言ってるし。

自信を持つだけの事は、してきているのだろう。

先生もそんな感じになりたいぜ。

サスケの次はナルトか。

サスケの好投を見た後なので、ナルトが対抗意識を燃やし、相当入れ込んでいるのがわかる。

力一杯投げただけ、という雑なフォームではあったが、ナルトの得物は的にめがけて勢いよく飛んでいった。

俗に言う、バカッ肩と言われるやつだ。

ど真ん中ではないが、命中したのは勢いを殺すように前後に揺れている。

サスケのように真ん中に命中することが気に入らないのか、ナルトは地団駄を踏んで悔しがっている。

そんなナルトを見て、サスケは相変わらず『フンッ』とか言っている。 沢尻か。

この頃は仲間とかそういう以前の問題だったんだなと、原作をしみじみと思い返した。

この里の運命を握ってんだから、仲良くしなさいよ君達。

全員の投擲術を見た後は、個人的な悪い癖等を教えてやり、何回か投擲を練習させて、俺のデビューとなった授業は終了した。

「投擲術は忍者の基本とも言える技術だ。初めはなかなかうまくいなくても、投擲術は投げた分だけ当たる！今後も、練習を怠らないように！」

教科書に書いてあるような結言で最後にしめて、生徒を解散させた。

解散した生徒達は元気よく校庭に飛び散って行く。

最初は大失敗したが、それなりに授業の形になっていたのではないと思う。

うまくいかない生徒に、身振り手振りで説明して、その生徒が的に命中させた時なんかは、やり甲斐を感じたと言つか、鳥肌が立ってしまった。

昔は教師なんか絶対にできないと思っていたが、こういう経験をしてみると、教師とは案外やりがいのある仕事なのかもしれない。

まだまだ実力は足りないが。

こっちの世界でも、これから何が起きるかはわからないが、精一杯

に頑張っていこう。

解散ぎわにサスケと目が合った。

俺はおもむろに手を挙げたらサスケは目をそらし、校舎の方にスタスタと歩いていってしまった。

他人を寄せ付けないオーラを放ちながら歩くサスケの後ろ姿は、少しだけ肩がプルプルしていた気がする。

授業前半の大失敗も、笑顔を忘れた少年がほんの少しだけでも笑顔になってくれたのなら、良しとしよう。

時刻は夕方になり、アカデミーは1日の授業を終え、生徒達は自宅へと帰っていく。

俺も明日の準備などを終え、アカデミーを出て帰路についたところだ。

「ミズキ先生！」

門を出た所でイルカ先生に声をかけられる。

「何ですかイルカ先生。」

「さっき生徒達がミズキ先生の授業の話をしながら帰ってましたよ！」

「…えっ？」

「何を、やっちゃまったんです!？」

うるせえ。

卒業

春が来た。

この世界の忍者教師ライフにも慣れ、木の葉の里で春を迎えた。

夏休み明けの初授業。

あれから、定期的に中盤で崩れるケイチ先生の穴を埋める形で、何回か授業を受け持った。

授業はいまだにうまくいかないが、教えるという喜びを異世界で知った。

そしてついに今日、ナルト達のアカデミー卒業試験の日を迎えた。

試験課目は分身の術。

合格ラインは3体だ。

原作では分身の術に失敗し、ミスきに唆されて、禁術の巻物に手を出してしまったナルトは、無事に分身の術を成功させ、めでたくアカデミー卒業となった。

試験後、俺を見て満面の笑みで親指を立てていた。

声をかけてやりたかったが、試験官という立場なので、頷くだけにした。

ナルトに限らず、何らかの形で関わった生徒達が分身の術を成功させ、アカデミーを卒業していく。

短い期間ではあったが、教え子の成長を実感する事ができた。

これからもどんどん成長していく生徒達の姿を、できる事ならずと見続けていたいものだ。

来年度に卒業する生徒や、新たに入学してくる生徒達を…

できる事なら……

卒業試験の前日、アカデミーでの勤務を終えて自宅に帰ると、もはや定期便みたいになってきていた霧の連中からの便りが届いていた。

これまではずっと暗号のような便りで、何を書いているのかさっぱり解らない文章だったが、今回の便りは普通に書いてあった。

「いいかげんにしろ

明日の夜、北の森に例のブツを持ってこい

1人で来い

約束破ったら全部バラす

あと、連絡くらいしろ

ばか」

あまりにも俺が連絡を返さなかったので、プツンきてしまったのか、随分と砕けた感じの文体だった。

定期的によその里の忍に暗号文を出すというのも、どうかと思うが。

気性が荒いと言われる人が、夏から春まで我慢したのだ。

原作の補正だと思うが、今はこの奇跡に感謝しよう。

巻物を持って行くにしても、場所がわからなくて困っていたのだが、これで一安心だ。

卒業試験も終わり、特にする事もないので許可をとって自宅に帰る。

あとは、夜になるのを待ち、巻物を持って北の森へ…

北の森は、俺の家から徒歩で1時間ほどの所にある。

忍の足なら、早い人で急げば10分くらいだ。

細かい場所まではあの手紙に書かれてなかったが、とりあえず森の中に入り、開けた所で待っていれば、見つけてくれるような気がする。

しばらく歩くと北の森に到着した。

俺は適当な所を見つけ、森の木を背もたれにして腰を下ろした。

この日がくる事はわかっていた。俺はこっちの世界に来て今日という日が来る事を知りつつも、対策らしい対策をまったく練っていなかった。

マンガの世界なんだから、ナルトがイルカ先生が助けに来てくれる。

そっという甘えた気持ちもあった。

殺されないために、修行はできる限りしてはいたが、劇的に強くなるなんて事はなかった。

鍛え方が足りないと言われればそれまでだ。

この問題を根本的に解決してやろうと色々考えたが、どの案も教師という立場や世間体などが足枷になり、実行する事ができなかった。

俺は、教師という仕事と里での生活をこれからも続けていききたかった。

そして腹を決めた。

もしも俺が、何か理由があってこの世界に来たというのなら...

「おい。」

背もたれにしている木の後ろから、声をかけられた。
さっぱり解らなかった。

「...ミズキだな。」

「...はい。」

声の調子から、俺と同じくらいの年齢だろうか。

「巻物は、持ってきたか。」

「…はい。」

「そこに置け。離れろ。」

「わかりました。」

俺は座っていた場所に巻物を置くと、声の主から10メートルほど離れた。

声の主、霧の忍は木の陰から姿を現し、巻物を手に取った。

この世界特有の、忍者のいでたちをしている。

顔は布のようなもので覆い隠しているようだ。この世界には、ベーシックな感じだ。

「確認させてもらっぞ。」

「…どうぞ。」

霧忍が巻物の紐を解き、内容を改めようとして広げた瞬間、巻物は爆発した。

俺は急いで木の陰に身を隠す。

— やったか？

巻物の中に、起爆札をしこんでおいたのだ。
見破られる事は覚悟していたが、やってみるもんだ。

ケガでもして帰ってくれば、助かるんだけど…。

爆発の煙が漂っている。

俺は霧忍の姿を探すため、木の陰から現場をのぞきこむ。

「こんな事だろうと思ったよ。」

「っ！」

すぐ後ろから声が聞こえた。

振り返ると、気づかなかったのが有り得ないくらいの距離に、霧忍がいた。

「ぐっ！」

反応する間もなく、霧忍の膝蹴りをもらう。

腹に入れられて、俺は2、3歩後ろに下がった。

霧忍はすぐに間合いを詰めると、手に持っていた小刀のようなもので斬りかかってきた。

―あたる

とつさにクナイをだし、斬撃を防ぐように構えながら、後方に大きく飛んだ。

霧忍との距離をとったあと、自分の体の違和感に気付く。

右手がなくなっていた。

俺がその事に動揺している間に、霧忍は先程と同じように間合いを詰めてくる。

「く、くんな！」

何も考えずに蹴りをはなつ。

回し蹴りはあっさりと霧忍に防がれ、左足を捕まれた。

―実力が違いすぎる

霧忍は手に持っていた得物で、俺の左足の腱を切った。

左足の拘束を解かれると、バランスを崩してしまい、その場に尻もちをつく。

尻をつくと同時に顎を蹴り上げられ、反動で後ろに吹っ飛んだ。

「オイオイ。お前、マジに弱いな。」

仰向けにのびている俺に、霧忍が近づいてきた。口の中では、折れた歯がコロコロしている。

「木の葉もマジで地に落ちたな。うちのアカデミー生の方がお前よりマジに強いぞ。」

この世界の人特有の変な口癖をしている。

霧忍は倒れている俺の喉元に小刀を当てた。

「…今さら霧を裏切っても、木の葉にお前の居場所なんかないだろ。」

「まだ残っている左手で、つきつけられている小刀を引き離そうとしたら、霧忍に足で押さえつけられた。」

「俺に恥をかかせやがって……！苦しんで死ね！」

喉を斬られた。

動脈は外され、喉仏のあたりか。

喉から呼吸がもれ、胃に血が入ってくる。自分の血でむせる。

霧忍は俺を押さえつけたまま、苦しんでいる様子を見ているようだ。

こつちの世界に来てから、トントン拍子とは行かないが、物事がいい方向に進んでいた。

単なる脇役だったのに、まるで物語の主人公にでもなったような勘違いをしていた。

多分なんとかなるだろうという、大きな勘違い。

この結果がこれだ。

目も霞んできた。開けていられない。苦しい。

不意に霧忍の拘束が解かれた。

さんざんなめにあっているので、動く気にすらなれない。閉じていた目をかすかに開くと、霧忍のいた所にクナイのようなものが刺さっている。

誰か助けに来てくれたんだろうか…。

かすむ目でクナイを見ていると、突然そこからナルトが現れた。

よく見れば、クナイには巻物がくくりつけられている。

ナルトはすぐに影分身を出して、霧忍と戦い始めたようだ。
よく見えない、苦しい。

開けててもよく見えないし、何よりきついで再び目を閉じる。

しばらくすると、誰かに揺すられている感じがした。
まだ生きている。我ながらしぶとい。

ナルトの声だ。

何か叫んでいるようだが、なぜか自分の心臓の音しか聞こえない。

もう、霧忍を片付けたのか…。やっぱりナルトは、強いな。

結局、こつちの世界に来て何もできなかった…。

何かを成す事も、教える事も…。

泣き叫び、無性に誰かを罵りたくなったが、喉をやられているのでそれもない。

何より、教え子が見ている。

みつともないマネはできない。

苦痛で歪んでいた顔を、必死に抑える。

多少ひきつつてるかもしれないが、これが限界だ。

心臓の音が小さくなっていくのがわかる。

次に目を開けたら、元の世界に戻ってたりしないかな。

ああ、苦しい…。

がんばれよ、ナルト…

数十年後。

アカデミーの門に1人の中年男性が立っていて、授業を終えて帰宅していく生徒達を見送っている。

中年教師は帰っていく生徒1人1人に声をかけ、手を振っているようだ。

あれから木の葉の里は、様々なでき事を経験した。

木の葉崩しとか、戦争とか、いろいろだ。

それらのでき事を乗り越え、木の葉は大国という名にふさわしい強い里となった。

雨降って地固まるってやつだ。

今は平和な毎日を送っている。

数十年前もそうだったように…。

大半の生徒を見送った中年教師は、校舎に戻ろうとした時、2人の生徒に声をかけられた。

「先生！」

「おお。まだ残ってたのか。どうしたんだい？」

中年教師は生徒達の視線まで腰をかがめると、優しく微笑んだ。

「先生つてさ！任務とか戦争で大活躍してさ！木の葉の英雄って呼ばれてたんだろ！？」

元気そうな男の子が聞いてきた。

「実力なら火影をしのぐって言われてるのに、何で上忍昇進の話も断って一介の中忍教師に甘んじてるの？」

次は、おとなしそうな女の子だ。

「…何か言葉にトゲがあるな。」

「もったいね〜！俺だったら絶対対に火影になって、みんなをアツと言わせてやるのに！」

「…先生、なんで？」

訪ねられた中年教師は、立ち上がって生徒達の頭に手をおいた。

中年教師の目は、少年だった頃の光を失わず、沈んでいく木の葉の夕日を見ている。

「…野暮な事は、言いたくないんだってばよ！」

金髪蒼眼の中年教師は、少年のような笑顔で生徒達に答えた。

「え？やぼ？やぼってなに？ねえ。」

「…私が大きくなっても先生がまだチョンガーだったら、お嫁さんになってあげようか？」

「コラ。どこでそんな言葉を覚えた。…お父さんやお母さんが心配するから、早く帰りなさい！」

「…はい」

「道草すんなよ〜！」

2人の生徒はアカデミーの門を出て、家に向かって駆けていく。

金髪蒼眼の中年は、2人の姿が見えなくなるまで、大きく大きく手を振り続けた。

「名前はうずまきナルト！」

好きなものは一楽のラーメンで、嫌いなものはまずいラーメン！

趣味は、ラーメンを食べる事だつてばよ！

将来の夢は…

野暮な事だから…

言いたくないんだつてばよ！」

カカシ先生は『野暮な事』が凄く気になった。

卒業（後書き）

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9094q/>

MIZUKI

2011年6月20日13時48分発行